浅野雅巳教授、鈴木登教授にお贈りする言葉

浅野雅巳教授および鈴木登教授は、本年度末をもって本学を停年ご退職になり、後進に道をお譲りになることになりました。統合・独立行政法人化を間近に控えた今、大学の重鎮でいらしたお二人の先生が去られることは、残された私共にとっては大きな痛手でございます。

思えば7年前に、大学設置準備委員会のなかの人事委員会で現島根県立大学の教員人事のお手伝いをご一緒させていただいたのが、浅野雅巳教授の謦咳に接した最初の時であったかと思います。爾来、年の若い学部長の私に、学部運営について文字通り手取り足取りしてご指導いただきました。前任校である成蹊大学での大学運営の中枢にいらしたご経験から出る的確なご助言にどれだけ助けられたかわからない程であります。

浅野雅巳教授は、時事英語学、英語学の分野で多くの優れた研究業績をあげられ、学会で指導的立場にいらっしゃると承知いたしております。日本英語学会では理事、副会長、会長をお務めになり、学会のリーダーとしてご活躍なさったことは、私共広く知るところであります。また、日本マス・コミュニケーション学会2005年度春季研究発表会を島根県立大学で開催していただくようご尽力いただき、開催に際しては自ら開催実行委員長として陣頭指揮をお執りになりました。これ等のご研究の成果をもって、成蹊大学大学院文学研究科（博士課程）および本学大学院北東アジア研究科（博士課程）での研究指導教授として、後進研究者の指導・育成にも力を尽くされました。

本学総合政策学部では、英語ディスコース分析入門、欧米Ⅱ、言語と文化、英語等の幅広い分野の科目をお教えいただき、山田政美教授との協同で３・４年の総合化演習もご担当いただき、多くの卒業生の卒業研究のご指導もいただきました。敢えて教務委員長をお願いし、文部科学省の大学設置審議会の指導監督のもとで総合政策学部を完成するというむずかしい時期の教務関係のお仕事でもご尽力いただきました。

鈴木登教授は本学開設の一年後の2001年４月、立命館大学教授をご退任後本学に赴任なさいました。私は鈴木登教授と同じ経済学を専攻していますことから、鈴木教授がご赴任なさるまでの継ぎとして、マクロ経済学とかミクロ経済学を担当いたしておりました。このことから、経済学の本流をご専攻なさっている鈴木登教授のご赴任を一日千秋の思いでお待ちしていたというのが、私と鈴木教授の個人的接点であります。その後鈴木教授は、本学の総合政策学会委員会（後に研究活動・総合政策学会委員会に改称）委員長として、総合政策学会における研究活動の活性化にご尽力をいただきました。その間、学会の同じ理事として鈴木先生には多くのご指導をいただきました。

鈴木登教授は産業連関分析、地域産業連関表による地域経済構造・開発の研究などに従事され、国際産業連関分析学会（IIOA)、国際国富・所得学会（IARIW）などの国際的な学会で活躍なさっていました。その後、経済学のパラダイム転換、総合政策学の認知体系の構築等の分野に研究関心を移され、本学にご赴任後社会科学全般の方法論的研究にご貢献いただきました。本学大学院開発研究科では幅広い視野から学生の研究指導に当られました。また、大学院開発研究科における若輩の同僚としての私共にとりましても、その幅広い視野からするご見識に接し、稗益するところ大でありました。

本学総合政策学部では、鈴木登教授はマクロ経済学、ミクロ経済学、政策文化論、地域産業構造論、近代化過程と現代諸制度等の広範な講義科目をご担当となり、総合化演習では幅広い関心をもつ学生の指導に当られました。総合政策学部における経済学分野の文字通りの重鎮として、経済学の教育の改善に尽力なさってきました。深い学識に基づく鈴木登教授のご指導に対して多くの学生が尊敬の念を抱いていたと仄聞いたしております。

浅野教授も鈴木教授も体調を崩されていると承知いたしております。どうか１日も早く本復され、ご退任後も私共後輩をご指導ご鞭撻いただきますように心よりお願いいたす次第でございます。

最後になりますが、浅野雅巳教授および鈴木登教授の本学でのご功績に対し、宇野重昭本学学長は名誉教授の称号を贈ってこれを顕彰されることを、申し添えます。

雪降る頃、春を待ちつつ
研究室にて

平成17年12月15日

学部長　今岡日出紀